



TITLE:

巻頭言

AUTHOR(S):

河井, 宏允

CITATION:

河井, 宏允. 巻頭言. 技術室報告 2010, 11: i-iii

ISSUE DATE:

2010-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/233410>

RIGHT:

巻頭言

平成21年度技術専門委員会委員長
河井宏允

1970年5月、宇治に防災研究所の本館が完成し、工学部、理学部に間借りをしていた防災研究所の各先生方の引っ越しが始められた。私はその年、京都大学工学部建築第2学科を卒業した。1970年は、安保条約の改定の年にあたり、吉田の大学内は騒然していたが、引っ越し先の宇治は別天地のごとく静かであった。私は修士学生および助手（現在の助教）として、それから7年間、防災研究所にお世話になった。修士論文の研究課題が「自然風中における建物に作用する風圧力」と決め、風圧観測を潮岬風力実験所で行うことになった。その頃、潮岬風力実験所は耐風構造研究部門に所属しており、尾崎さんと河内さんという2人の技術職員（当時は技官と呼んでいた）の方が常駐されていた。研究を始めたばかりで右も左も分からなかった当時の私に、尾崎さんと河内さんは屋外観測のいろはから教えてくれた。2人は、電気および土木の知識と体力に優れ、観測の遂行になくてはならない人材であったが、それに加えて潮岬出身で地元の人とも親しく、私たち研究者のどのような要望でも、直ちに答えられる人脈を有した。お蔭で、私は無事、修士論文を仕上げることができた。助手になってからは、潮岬での観測に加えて、宇治で風洞実験による研究を開始した。宇治の風洞には羽野さんと杉政さんが常駐していた。彼等からは、風洞実験を模型の製作を含めて一から教わることができた。潮岬風力実験所をはじめとして、技術室ができるまでは、全ての技術職員は部門（研究室）に所属していた。そのため、どの技術職員も所属する研究室の研究に極めて深く係わり、実験や観測などでは、学生や若い助手を指導する役割をはたしていた。もちろん、彼らにも得意、不得意、好き、嫌いがあったが、その経験は若い研究者が育っていく上で、なくてはならないものであった。

縁あって私は2000年9月から防災研究所に再び勤務することになった。所属は1996年の改組に伴って、部門から分野へと名称が変わったとは言え、以前私が助手として勤務していたと同じ耐風構造研究分野であった。風洞には、以前と同様、羽野さん、杉政さんが常駐されていたが、彼等はもはや耐風構造分野所属ではなく、1996年に行われた改組によって、所属は技術室になっていた。改組の時には、各部門やセンターに所属していた技術職員を技術室という統合組織にまとめることの目的や意義などが十分議論されたと思うが、実態は以前とはあまり変わっていないような印象をもった。勿論、私個人としては、23年間のギャップは大きく、以前の先生方のように、技術職員と緊密な関係を築くことは難しかった。これは、防災研究所の黎明期から研究を支援してきた技術職員は、部門所属というより、一緒に研究を進めてきた先生方と一心同体という感覚を強く、新しく赴任した先生に対して積極的に支援するような関係を、すぐに築くことは心情的にも難しく、私も彼等に十分に応えられ

るものを持っていなかったことが原因であった。

防災研究所に赴任してしばらくして、私は技術専門委員会の委員に指名された。赴任したばかりの私は、防災研究所の改組後の新しい組織については、ほとんど知識がなく、技術専門委員会がどのような役割をもった委員会であるかも全く認識していなかった。当時の委員長は、今年度に防災研究所に退職される関口先生であった。関口先生は、技術室を設立された本来の目的に沿って部門やセンターからは独立して、防災研究所全体の技術支援を行うとともに、技術室が独自で防災研究所の中で一定の役割を果たすべきとのお考えを強くもたれ、積極的に技術室改革に取り組まれていた。これは、この時期から年配の技術職員が次々と退職され、新しい技術職員が徐々に採用されることになったことや、定員削減で技術職員の数が年々減少し、もはや、昔のように特定の部門やセンターに技術職員を配置し続けることが困難になったことや、防災研究所のホームページやメールサーバーの管理など、防災研究所全体に係わる技術的仕事を技術室が担うようになったこと等が関係していた。

技術職員を特定の部門やセンターに配置することができない状況の中で、技術室全体で防災研究所の研究をサポートする目的で取り入れられた制度がローテーション制であった。ローテーション制は特定の技術職員を部門やセンターに長期間配置せず、2年あるいは3年で配置する部門やセンターを変える仕組みである。この仕組みは、新しく採用された技術職員から順次実行されたが、技術職員の間にも、あるいは部門やセンターの先生と技術職員との関係においても大きな影響と問題をもたらした。

ところで、新規に技術職員を採用された技術職員は、文部科学省が国家2種試験合格者の中から選ぶように指導したことや当時の就職難から公務員の魅力が高まり、大学院生のような高学歴の学生が国家2種試験にも受験するようになったことなどを反映し、その多くが大学院修了者となった。そのため、これまで採用された技術職員とは、年齢の他学歴でも大きなギャップを生むことになったと同時に、研究支援のあり方についてもギャップが生まれた。

最初に技術専門委員会委員になってから8年を経た昨年4月、突然技術専門委員会の委員長に指名された。私なんぞと思わなくもなかったが、それ相応の年にもなっていたので、お引き受けをすることにした。私が防災研究所に助手として勤務をし始めた時に技術職員であった方の多くは退職され、技術職員の多くは技術室ができてから採用された人たちであった。私が技術専門委員長に就任をして最初に感じたのは、個々の技術職員が採用時に思っていた仕事の内容と、実際の仕事との間にあるギャップ、および配置されている部門やセンターでの仕事との違いから来る技術職員間の相互理解の不足であり、それが技術室全体としてのパワーとやる気を削いでいるのではないかということであった。ローテーション制に対しても、ローテーションの際の経費を個人が負わざるを得ないなど、技術室の中だけでは解決しきれない問題も多くあり、技術職員の間では、制度の目的は認めても実際には難しいと考える人も多く、このままの形でローテーション制を継続することは非常に難しいと感じられた。

私は、日頃から、技術職員こそが防災研究所の構成員の誰よりも防災研究所の未来を担っていると思っている。というのも、防災研究所の中で、技術職員は他のどの職

種の人達よりも長く防災研究所に勤務することになり、過去、現在、そして未来へと続く防災研究所の歴史とともに仕事をし、生活しなければならないからである。技術職員の未来が防災研究所に掛かっているのと同時に、防災研究所の未来も技術職員の仕事のあり方に深く係わっていると言っても過言ではないのである。

私は、技術職員に自分たちの行動が防災研究所を左右することを自覚してもらうための第一歩として、技術職員相互の理解が不可欠だと考え、中断していた週一回の全技術職員会議を復活させ、技術室の運営や技術職員の役割、その他について話し合ってもらうことにした。それとともに、個々の技術職員がどのような考え方をもち、どのようなことで悩んでいるのか、どうしたいと思っているのかを自由に話し合ってもらうため、大学近くのレストラン饗宴で月に一回、私も交えて個人的な交流を深めてもらうことにした。これらの交流が今後どのような成果に結びついていくかは分からないが、組織の強さの根源がコミュニケーションであることを考える、今後が楽しみである。

ところで、去年から今年に掛けて採用した技術職員は、坂さん以外の技術職員、即ち園田さん、久保さん、市田さんは全て隔地の観測所での勤務である。これは、隔地での観測のノウハウを継承し観測態勢を維持するためには、やはり地元から人材を求める方が望ましいとの考えからであったように思われる。種々の理由でローテーション制が行き詰まりを見せるなかで、会社のように命令一つで全国各地に転勤させることは難しいことが技術専門委員会でも認識された結果であった。確かに、隔地の観測所の維持は、防災研究所の研究の発展にとって必要不可欠のように考えられるが、隔地の観測所の多くが40年以上の歴史を持つに至った現在、隔地の観測所を今後ともこのままの形で維持を続けることは無理であり、新しく採用された技術職員の未来を含めて、今後起こり得る状況に対応する方策を防災研究所および技術室で十分に討議する必要があると思われる。

今年度、吉田室長と藤原グループ長が退職される。40年以上もの間、防災研究所の研究を支えていただいたことに心から感謝の意を表したい。「吉田様、藤原様、本当にご苦労さまでした。」、とは言っても、お二方には再雇用職員という形で更に数年の間、防災研究所の研究を支援していただくことになる。これまで同様に、いや今後一層よろしく願いをしたい。

ところで、吉田室長の退職に伴い、新しい技術室長を公募している。本報告が出版される頃には、新しい室長候補が決まっていると思う。防災研究所の中で、今後ますます重要性が高まるであろう技術室が、組織的にもしっかりと発展するために、技術職員が新しい室長を支え、積極的に研究を支援するとともに、防災研究所の歴史の番人として、自ら声を出していくことを望んでいる。